

# 連珠っておもしろい

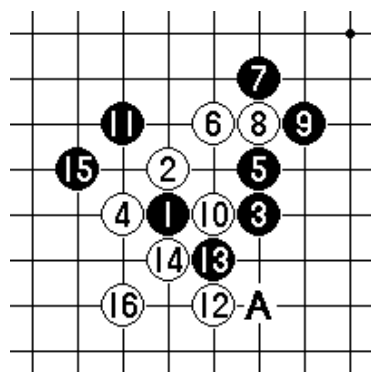
## 九段 河村典彦

### ● 第43回 ●

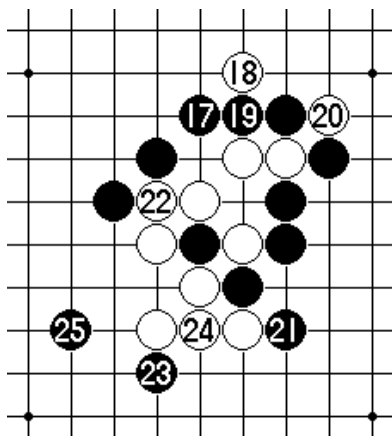
#### チーム世界戦総括

チーム世界戦が無事終了した。惜しくも3位に終わったが、改めて連珠の魅力に気づかされた世界戦であった。連珠という共通の言語があるだけで、いろんな国々の選手と仲良くなれることが何より嬉しい。また、対抗戦という意味でもチーム戦は楽しい。準備や大会の様子については連珠世界で語っているのので、ここでは私自身の局を振り返ってみたい。

3回戦、中村九段が仕事というところで、大事な中国戦の大将と戦うことになった。相手はむちゃくちゃ強い(田村君の言葉)という李一さん。長い局になったので、順を追って解説したい。



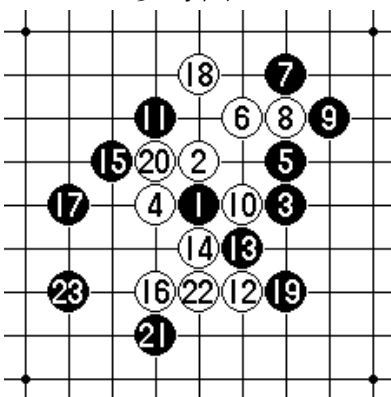
中村氏と対戦したかったらと思うのが、勝つことを優先するならば私の方が良かっただろう。金星三題を指定されたので、切違いに疎いのでこの5にしました。とは言え、実戦で打つのはほとんど初めてである。白12と開かれ、やばいとは思いつつ平然と黒13に防ぐ。白14と引かれこれは嵌ったかと気持ちで負けていた。14と打ったからには16は当然だろう。なるほど、うかつに引くとA点が四々禁面になる。見たことのない局面で、さて困ったというの



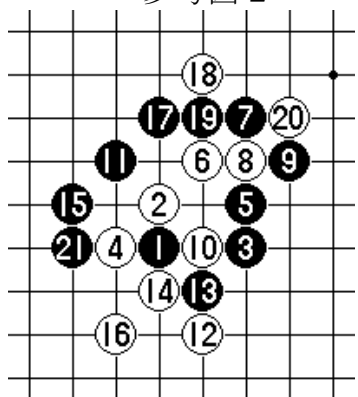
が正直な所であった。

いろいろな考えたのだが、対局中は黒25までしか思いつけなかった。まあこれならすぐには負けないだろうという読みもあった。しかし、後で教えてもらったのだが、黒17からは参考図1のように打つ手があった。また、参考図2のように黒21と打つ手もあった。これは後に田村君が打ったのだが、この手は白のノリ手かわしつっ先手を取る一手で、打たれてみるとなるほどという手である。この順を逃しては、少々苦しくな

参考図1

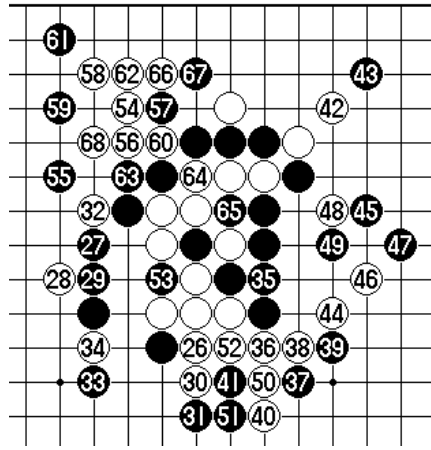


参考図2



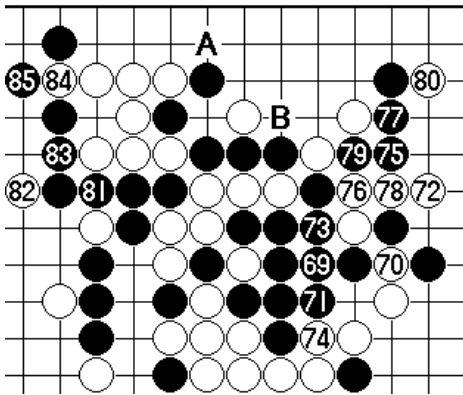
った。本譜に戻って、予想はしていたものの、白26と打たれて困った。黒27、29は貯金をはたいて防ぎに行つたような手で、苦しさを物語っている。ただ、黒35は苦しいながらも頑張った手だと思っっている。白40と防ぎ

に来てくれたので少し安心した。しかし、油断がならないのが中国の大将。黒45ではおとなしく46に叩いておけば良かったのだが、ちよつと色気を出して45、49と打ったのが良くなかった。



ここで李さんがうなつて考えているので何を考えているんだろう?と、思っていたら、何と予想外の50、52が飛んできた。先手を取って54に打ちかけたのである。うなつていたのは右辺に黒勝ちが残るかどうか

参考図3

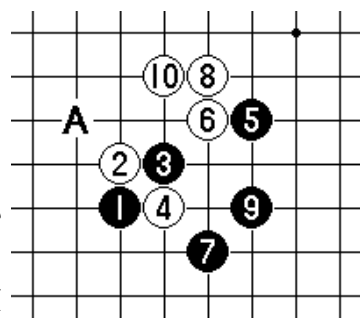


読んでいたのであった。「これは本気で勝ちに來てなつた。私相手に満局では不満という訳である。ならばと必死で防ぎに行つた。黒55に叩いて大丈夫と思つていたが、相手も白58と工夫してきた。ここで訳が判らなくなつたのだが、黒59が勝負術である。剣先を作つておかないと粘れないという直感でもある。白60と引いてくるならある程度読みの範疇で、白68と四迫いを含まれた時が問題の局

面であつた。ここから右辺の四ノビ筋を目いっぱい使つて77、79に黒石を入れてから81以下を打つておけば、満局必至であつた。しかし、白Bと打たれてからこの四ノビをしようと思つて黒69から81以下を打つたのだが、白A、Bと打たれ、今度は右辺の四ノビがノリ手で利かない。(白76に石が入るとノリ手)白Bと三々を打たれた所で投了となつた。この四ノビを打つておかなかつたのが痛恨であつた。結果的にここで半星拾つていたら優勝していた。チームにとつても痛恨の一局であつた。

もう一局、負けた譜をご紹介しよう。結果的には関係はなかつたが、この局は私にとつて痛恨の一局である。寝坊であやうく不戦敗になるところであつた。持ち時間の半分を消費し、仮後と思つていたら仮先で慌て、花月を指定したのだが、

白6にしめたとばかりに黒7と打つたのが手拍子だつた。白8と打たれてみると適当な手がない。黒7はAだつたのかと反省したが、それだと白6で7と引く手が絶対ではなくなり、作戦に幅が生まれる。痛い一敗であつたが、対局をすれば必ず何かしら得るものはあるものである。



白：ピドゥブニ  
(ウクライナ)

さて、八月から単身ドイツに住むことになる。次号が出ている頃にはもう既に異国の地であるのだが、未だにピンと来ない。連珠の研究がこれまでよりもできているのが今の楽しみである。様子的に今では次号に。